

講談 蒯大富演義（下）

丘 引

（訳）山本秀也

第6回 野心ヲ全ウシ、狂喜シテ暴君 ヲ助け、策ヲ授ケテハ又人ヲ害 セシム。

さても例の董申が蒯大富をおだてまくっている時、また電話のベルが鳴り始めた。秘書が電話口に出たが、驚いてすぐさま蒯大富に伝えて来た。

「早く電話に出て下さい。総理からです」

蒯大富は何かまた良い知らせに違いないと勝手に思い込み、喜び勇んで電話に出た。

この時の周恩来の第一声を、一体誰が想像出来たろう。

「今夜君たちがやったことは、実に卑劣だ。真の革命家たる者のやることではない。王光美をすぐ中南海に送り帰しなさい。これは中央の決定だ！」

蒯大富はこれを聞くと、さすがに落胆しきった様子だった。受話器を握ったまま董申の方を見やっていたが、董申にしても首を振るより仕方なく、蒯大富も歯がみしながら、

「明日の朝までに必ず送って行きます」

と、総理に王光美の釈放を確約したのだった。

読者諸兄は、なぜ周総理がかくも早くこの次第を知り得たのか、いぶかしく思われるであろう。もともと周総理には中南海に居住する要人の保護責任があり、劉少奇・王光美夫妻が車で中南海を出たことも、警護官から連絡を受けたため、人を遣って探らせていたのだった。

蒯大富は、部下に王光美を送って行かせると、董申に言った。

「周総理は、なんで江青女史と波調が合わない

んだらう？」

董申はあくびを一つすると、かぶりを振りながら答えた。

「こぼすな、こぼすな。もうすぐ分かることだ」

そうして2人は苦笑いしながら秘書の女の子を追っ払うと、けだるげに机の上に横になった。

半年もやっているうちに、蒯大富は身邊に3、4人ほど男女の秘書を置くようになった。またボディガードも配置され、車も数台、常時待機しており、もう万に及ぶ兵馬を統率する司令官の貫禄十分であった。

虜となった王光美は成すことすべて裏目に出てしまい、もう居ても立ってもおられないほど不安でたまらなかった。ここ半年来続いている授業ボイコット、サボタージュ、大交流、加えて29の省、市、自治区で、それぞれに有能だった地方幹部たちが、例外なく失脚してしまっていた。生産活動に従事するものはおらず、3年に及んだ自然災害の後、人々が少しずつ、しかし確実に蓄積してきた蓄えさえ、完全に喰いつぶしてしまっていたのであった。周恩来首相は自分自身家庭を営んでいたことから、日ましに暮らしにくくなっていくことを実感していた。また同じ頃、毛沢東主席は南方を視察したが、ただ呆然と立ちつくし、そして12月20日までにあらゆる大交流を中止するよう命ずるばかりだったと言う。年も暮れた頃にはさすがに騒ぎも一段落した感があったが、早くからケンカ鳥として売り出した蒯大富が、一体どうして平穏な世の中に満足出来たろう。

ちょうどこの時、聶元梓が蒯大富を訪ねて来た。彼女は齢五十を越えようというのに「紅衛兵」になったりしたため、陰で北京中の人々の笑い者と

っており、「皇太后」などとあだ名されていた。蒯大富はこの文革の大先輩に対して以前ほどの敬意を払わなくなっており、彼女が来ても当り触りのないよう適当にあしらっているのだった。聶元梓の方でもこれには薄々感づいてはいたのだが、年少の革命の戦友が1人、自分に好感を持っていないことなど、実際のところどうでもよかった。

蒯大富の執務室に入って来るなり、聶元梓は言った。

「大富、今日やって来たのは康生同志のお申しつけなんです。康生同志は今上海にご滞在ですけど、曹軼欧を通じて電話で言っておられた話では、近日中に上海で大仕事をやるので、私たちにも何人か手勢を連れて上海まで来てほしいんですって」

蒯大富は思わず奮い立ち、「何ですって？」と問いただした。しかし聶元梓も、

「私もよく知りませんが、ただ、文化大革命をこんなあいまいな形で立ち消えにすることはできません。結局何とか方法を講じて、続行させなくてはならないでしょう」

と首を振る。蒯大富は暫し考え込んだが、突然はたと膝を打った。

「そうだ。こう言うからにはきっと、政権奪取をやるつもりだ」

「どうしてそんな事がわかるの？」

聶元梓は蒯大富を一瞥すると、こう尋ねた。

「ご覧なさい。全国どこの省でも、実権を持った者など誰もいやしない。どこもかしこも完全に機能が麻痺している。だけどその一方で我々造反派も、党の政務や財務の実権を掌握できずにいるわけです。壁新聞の紙を買うのに、上から下まで役人を頼みまわらなければならぬのが現状でしょう。今を置いて、権力奪取の機会はないと思いますがね」

聶元梓は蒯大富の分析に、心中舌を捲く思いだった。

「そう思うんなら私たちも早く行きましょうよ。

中央文革小組の方ではこの件はもう了解済みですから、あなたから知らせる必要はありません。ただし行動はあくまでも機密に」

翌日、2人は秘書を伴って空路上海入りした。曹軼欧は一足先に空港で2人を待ち構えており、秘書には先に復旦大学で待つよう命ずると、別な方角へ2人を案内した。

やがて車は厳重に警備された公館に到着し、2人は曹軼欧に連れられて、一棟に設けられた会議室にやって来た。中ではちょうど会議が開かれており、満座の中、張春橋と姚文元が前方に坐っていた。参加した面々は、曹軼欧に伴われた蒯大富、聶元梓の2人が入って来るや、一斉に立ち上がって拍手で迎えた。

曹軼欧が、

「北京からご到着のお二方です。こちらが北大の聶元梓さん。そしてこちらが清華の蒯大富さんです」

と紹介するや、言い終わらないうちにまた拍手が起きた。

拍手の中を中肉中背、歳の程は40前後と覚しき男が歩み出て、力を込めて蒯大富の手を握り締めた。この人こそ誰だろう、後に江青らと「四人組」を結成する王洪文なのだが、当時はまだ上海の「労働者総司令部」の一幹部にすぎず、全国的には全くの無名であった。

空港からの車中、曹軼欧は2人を上海に呼んだ目的を、当人たちに説明しておいた。もともとこの会議は、上海の造反派指導者が一堂に会し、「全上海人民に告げる書」と題する、全面的な奪権を目的とした文書を起草するためのもので、蒯大富があらかじめ考えていた通りのものだった。会議は特に長時間に及ぶものではなく、王洪文が採択案を読み上げた後、それぞれが文書に署名するだけのもので、蒯大富も「清華井岡山上海駐在事務所」の名義で署名をすませた。かくして、中国にさらなる混乱を招くことになるこの文書は、ここ

に世に出ることとなったのである。

全員が署名を終えると、曹軼欧が副本の方を受け取り、康生宛に送付した。1967年の1月4日、この文書は上海放送局からラジオの電波に乗り、さらに数日後には『人民日報』もこの文書を評する社説を発表した。こうして暗雲が立ちこめ始め、全国各地を怒涛のような奪権闘争の浪が襲うようになると、周恩来首相が考えていた生産復興計画などは、全くの不可能事と化してしまった。

蒯大富が上海から戻ると、清華大の学内各部門はすべて井岡山派に接収されており、ここにきて、彼は名実共に清華の主となったのである。

2月ももう末と言う頃になると、奪権闘争の浪もいささか衰えを見せ始めていた。1ヶ月余りにも及んだ繁忙の日々に、蒯大富もさすがに疲労を感じるようになり、清華の学内で駑蕩とした日々を過ごしていた。そんなある日のこと、彼のもとに江青からすぐ中央文革小組まで来てほしい、との電話があった。蒯大富はまた新しい任務ができたと知るや感激して力みかえり、すぐ車の支度をするよう秘書に命じた。

釣魚台につくや、警備官の案内で会議室に通された。他の何人かの学生「指導者」たちも、先に着座している。蒯大富が入って来ると江青は笑みをこぼし、立ち上がって手を差しのべ、

「ようこそ。『一月の嵐』の英雄さん」と迎えた。

蒯大富はこの時江青と向かい合っても、もう以前のような緊張は感じなくなっていた。自らの知己に対する時のように、気軽に「いつもあなたと共に」と応じたのだった。

江青は口元をはころばせて楽しげにふるまっていたが、突然、殺気のこもった視線を走らせた。学生幹部たちは息をのみ、部屋の空気はにわかには張りつめたものとなった。

江青は一瞬黙り込んだかと思うと、急に大声を

張り上げた。

「実に憤慨すべき情報があります。中央にいる右派分子は、毛沢東主席と中央文革小組に対して、攻撃をもくろんでいるのです。我々をはさみ打ち、行動にブレーキをかけ、この中国の命運を左右する大革命を潰しておいて、我々に誤りを認めさせようと言うのです。どうして我々が黙っていられますか！」

学生幹部たちはなにぶんにも内情を知らぬため、にわかには話が理解できなかった。江青は誰もこたえないのを見るや、再び声を張り上げた。

「これは反革命行為です。あなた方、奴らが好き勝手にするのを許せるんですか！」

蒯大富はここまで聞くと、その意図を察してこう答えた。

「江青同志。誰のことか言って下されば、我々が必ず引っ捕えて来ます」

「よろしい」

ここで江青は笑顔に戻った。

「あなた方は今日までずっと、中央文革小組の鉄の拳となると言ってきましたね。今日来てもらったのは他でもありません。あなた方のその拳を借りたいのです。最近開かれた中央会議の席上、何人かの老将、副総理たちは傲慢この上なく、あれこれと難くせをつけては劉少奇ともう失脚している走資派のために、盛大に不平を述べたてています。『一月の嵐』が走資派の実権を奪ってからわずか1カ月にして、連中は早くも反撃に出ようとしているのです。これは階級闘争の理論に、ぴたりと符合するではありませんか。我々はこの『二月の逆流』と名付けましょう。あなた方はこれから共同して作戦行動をとり、下の方からこの逆流に抵抗し、我々中央と共同歩調をとってほしいのです」

「我々は戻り次第、ただちに『二月の逆流』に対して批判活動を開始します。ただ、劉少奇を中南海から引きずり出せるのは、一体いつになる

んでしょうか」

と蒯大富が言うと、戚本禹がこれに応じた。

「『一月の嵐』を経た後、またも続く『二月の逆流』批判キャンペーンで、劉・鄧司令部にはもう何の実力も残されはしないだろう。劉少奇を捕える機も、もう熟したよ。とにかく『二月の逆流』批判キャンペーンを実施することが先決なんだ」

この話を聞いて、蒯大富はすべてを納得した。

その翌朝、各大学の造反派は街に繰り出して、「二月の逆流に反撃せよ！」のスローガンを書いたアジビラを、北京中に貼りまくった。道を行く人々は往来に貼られたビラを見て、「二月の逆流」とは何かと知りたがったが、宣伝カーはマイクのボリュームのみ高く、内容の方は何ら具体的なことを含んでいなかった。このことから恐らくは、中央政界に何か重大事があり、何人かがまずい事になったに違いないと推測された。果せるかな、日ならずして譚震林の名が巷に流布され、また数名の老将、副総理たちも難を逃れることはできなかった。かくして、中央政界に「まだ潔白な」者などもう幾らも残っておらず、劉少奇ですら、やっとのことで刃をかわしているところとなった。

蒯大富は、中央文革小組が劉少奇包囲の輪を次第にせばめていることを目の当たりにし、心中愉快でたまらなかった。しかし王光美を一度捕えておきながら、首相命令によって解放せざるを得なかったことを思い出すと、苦いものがこみ上げて来るのだった。そして、

「おのれ王光美。貴様を清華園に引っ立てて来ないことには、世間に顔向けできんのだ」

と心中呟くと、やおら電話に手を伸ばして江青の事務所を呼び出した。

「江青同志。劉少奇は今や風前の灯同然です。ここでひとつ、我々は王光美を総括にかけて、劉少奇に最後の一撃を加えてやりたいのですが」

江青は少し考え込んだが、

「大富、この件は私たちも責任を負いかねます。

先に、戚本禹宛に王光美の査問を要求する手紙を書き、彼から王光美に渡してもらおうと言うのは、如何なものかしら」

蒯大富は、

「この婆さん、なかなかどうして小狡いじゃないか。本当に俺を棒っきれがわりに使ってくれる」
と心中舌打ちしながらも、口では、

「我々は江青同志の指示に従って行動します」と誓ってみせたのだった。

戚本禹はこの時すでに、中央弁公庁で要職に就いており、職権を利用して蒯大富の要求書を王光美に手渡した。

しかし王光美は、劉少奇にさらなる精神的なショックをあたえることを恐れて、このことは決して夫に漏らそうとはしなかった。彼女は、中央文革小組がすでに態度を決めたことを知った。行かないわけにはゆくまい。が、見方を変えるならば、これは何と言っても、民衆と接する機会でもあるわけで、直接自分の主張を述べることも出来ようと言うものではないか。そう考えたあげく、彼女は清華大学での批判集会に赴くことにしたのである。

しかしこの時すでに、蒯大富の方で手回しよく、王光美批判集会のポスターを北京中に貼り出していようなどと、どうして彼女自身知ることができたろう。娘の劉平平はこのポスターを見て母の身をととても気遣い、家に帰ってから夕食の食卓でこのことを話した。

劉少奇は話を聞くや、テーブルを叩いて立ち上がり、王光美はあわててその場を繕った。

「清華大学での集会には私が行くのよ。私は行って、大衆の査問を受けなければ……」

劉少奇は憤慨した。

「君は命令を実行する人間であって、政策を決める側じゃない。なのに、なぜ君が総括されなければならないのだ」

ここまで言うともますます自分を押え切れなくな

った彼は、さらに続けた。

「私を反革命分子に仕立てようとしている者がいる。でも私は天地神明に誓って、過去にも、今現在も、そしてこれから毛主席に背くことはしない。マルクス・レーニン主義、そして毛沢東思想に背くようなことは、決してないのだ」

ここまで一気に言うと少し言葉を休め、一息ついて、今度は優しく子供たちに言った。

「これから先、父さんが死んだら、どうかお前たちの手で骨は海にまいておくれ。その海は7つの海に続いているだろう。父さんは、世界に共産主義の明日が訪れる日を、見守っていたいんだよ」

4月10日。王光美は彼女を護送するため差し回された車で、清華大学に到着した。

清華大学東部グラウンドには、夜が明けたばかりと言うのにもう人がひしめき合い、30万近い人々が皆、首を長くして議長席の方を見据えていた。中には「階級の敵」と力みかえっている者もいたが、その他大半の人々は、王光美の風采を一目見ようと詰めかけているにすぎなかった。

王光美は車を降りると、すぐに数人の屈強な男たちによって舞台裏に連れ込まれた。どこから手に入れて来たのか、王光美が洋行する際に着ていたと言うチャイナドレスを取り出し、彼女を押えつけると無理矢理その服を身にまとわせ、ピンポン玉でこしらえた「ネックレス」を首から下げさせた。

王光美は落ち着いた様子で抗議した。

「毛沢東主席は、文闘（理論闘争）をせよ、武闘（武力闘争）はするな、と指示しておられます。あなた方は私を辱めただけでなく、あなた方自身をも辱めているんです」

が、この手合のものが耳なぞ貸そうとするはずもなく、腕を取ると彼女を舞台に連れ出したのだった。

議長席では蒯大富が、

「打倒劉少奇！」

と腕を振りかざして絶叫していた。が、実のところ、心底これに和している者などごく少数で、大多数の人々はこの異様な総括場面に驚き、爪先立って前の方を見ては私語を交して、多少なりとも痛快事と感じていたのだった。

蒯大富の女秘書が前に進み出て、声を張り上げた。

「王光美、お前は三反分子か」

こうした場合、王光美が敢えて強情を張ろうなど一体誰が思ったろう。しかし彼女は、静かにマイクの前に進み出ると、群衆に向かってこう言ったのだ。

「私は一度たりとも毛主席に背いたことはありません。これからも永遠に同じです」

これを聞いた例の女秘書は、地団駄を踏んで絶叫した。あのごろつきどもが王光美の腕をねじり上げ、ジェット式と言う、飛行機の格好をとらせた。蒯大富は手下に向かって、王光美の気焰をくじけ、と叫び続ける。

王光美の身に振り降ろされた拳は数知れなかったが、彼女は尚も倒れないで身を支え、そして「私は反革命分子です」などとは、一言も口にしなかった。

この総括は正視できないほど残酷なものであったが、台上の王光美は身をもって会場にいわせた青年たちに啓示を与え、彼らの意識を喚起したのだった。

これ正に、

俊傑頭ノ低カラザルヲ畏ルコトナク、

志士豪言シテ後人ヲ励マス

の言葉通りであろうか。

第7回 中南海前ニ鼓操多ク、 天安門上ニ狂言ヲ盡クス。

春が過ぎ夏がやって来たが、中華の大地にはさ

らに重く暗雲が垂れこめていた。

江青が指折りかぞえてみると、文化大革命も始まってから早1年余りにもなっていた。各地方レベルでの党、政両面での権力奪取の方は、おおむねかたがついたし、今度こそ劉少奇を捕えてさらし者にするという方も、機は十分に熟しており、康生、陳伯達とはかった上で、戚本禹に行動の指揮をとらせようと考えていた。

が一方、当の戚本禹の方では任務を与えられたものの、実際のところ困りはてていた。

「主席は南方視察に出かけてまだ帰京しておりませんし、その間、中央の案件処理には周総理が当たっております。劉少奇を中南海から連れ出して公開批判闘争にけることなど、総理の同意が得られるはずがありません。かりに、事前の承諾なしに強行したりすれば、総理は必ず私の責任を追求してきます」

康生はこう答えた。

「やはり、先に群衆を焚きつけるのがよかろう」

「群衆が騒いだところで、無視されるのではありませんか」

これには康生もムッとして、声を荒げた。

「大衆を信じ給え。言っとくがね、造反派の根性と言うものを少しは心掛けるべきじゃないかね」

戚本禹はこんな「悪人狩り」の手段では、総理を欺けぬことなど分かってはいたが、今に自らが断罪台に引き出されるようなことになろうとも、こればかりはツラの皮を厚くしてやらざるを得なかった。彼はそこでひそかに、あの五大学生指導者を釣魚台の迎賓館に招き、周総理を身動きとれぬように押え込む方策を協議したのだった。

7月。炎の様な太陽が照りつけたある日のこと、西長安街には千、万にものぼる大学生、高校生が突如として現れ、数十台もの広報車も交えながら、スローガンを叫びつつ新華門に向かって進んで行った。これに呼応して別働隊が中南海の大、小2つの西門、および北門を封鎖し、水も漏らさぬ包

囲網を形成した。そうして数名の代表が周総理に、劉少奇を査問にけるためにその身柄を引き渡すよう求める内容の、要望書を手渡したのである。

周総理は要望書を受け取るや、ただちに西通用門まで出向き、劉少奇の処遇については中央で決めるからと、学生たちに解散するよう呼びかけた。

しかし一方では、これと時を同じくして、陳伯達が、北門に詰めかけた造反派の学生たちを労っているなど、誰が思いつくか。周総理が北門に説得にまわると、今度は戚本禹の方が西門に姿を見せ、学生たちの代表との面会に応じるといった具合である。周総理が再び西門にとって返した時には、西門正面の歩道に「劉少奇奪取最前線」と大書きされた横断幕が張られていた。デモ隊のうち数十名の学生は西門突入をはかって、警備の機動隊ともみ合っている。これを見た周総理は怒心頭に発した。

「諸君があと1歩でも前に出れば、私に殺意を持つものとして諸君を敵とみなします。中南海は党中央の所在地です。どうしても中に入りたければ、私の体を踏み越えてから入り給え！」

デモ隊の前に周恩来総理が仁王立ちになっているのに、誰があえて突入するだろう。皆、すぐと引きさがるしかなかった。

「劉少奇奪取最前線」の旗挙げから数日間、百万にも及ぶ学生たちは欺かれるままに、中南海附近をデモ行進した。宣伝カーも夜を徹して吼えまくっていたが、それでもなお周総理は泰然と構えたまま、動こうとはしなかった。これには戚本禹の方があせり始め、董申を呼んで、蒯大富に解決策を具申させるように命じた。

果せるかな、蒯大富は切れ者であった。彼と董申が会った翌日、中南海西門前に学生が数人ふらりと現れた。物を言ったり何か叫んだりは一切しない。これは如何なる戦術なのか、お分かりだろうか？——蒯大富が奥の手をその学生に指示したのである。すなわち学生たちは静かに座り込んで、

ハNSTを始めていたのだった。

戚本禹は報告を受けると早速西門まで行って様子を見届け、またすぐさま、江青の所に喜び勇んで飛んで行った。江青もこの知らせを聞くと、ひとしきり蒯大富の才覚を賛え、そして戚本禹に命じた。

「学生たちの健康を損わないように。すぐ水を提供すること。水の中には砂糖を入れてね」

ものの30分もせぬうちに、戚本禹は水を届けに西門にやってきた。

「学生の皆さん。江青同志は、皆さんがこのような行動に出られたことには、賛成しかねておいでです。皆さんが体をこわされることを心配して、こうして水を届けるため、私をつかわされました」

ハNSTの学生たちは江青から差し入れの水と聞いて、先を争って飲み始めた。時、正に夏の盛りであり、ほんの何刻か座ってただけで喉は焼けつかんばかりになる。一口飲むとこれが甘い。言葉にはしなくとも、江青の意図は完全に造反派にしみ込んで行った。

一方、周総理の方でも事の次第を察知すると、ハNST参加の学生に愚行は直ちに中止するよう呼びかけた。しかしすでに江青に抱き込まれてしまっている学生たちが、どうしてこれを聞き入れよう。「劉少奇奪取最前線」に集まる人数は日ましに増え、中南海の外壁に沿って数十ものテントが張られた。百台はいようかと思われる広報車のラウドスピーカーは、中南海に向かって休む間もなく叫び続けていた。

さても、この日の朝、早々と起き出した江青は秘書に命じて、周総理に電話をかけさせた。江青は周総理が夜の間に仕事をする習慣なのを承知の上で、朝方の寝込みを襲い、徹夜明けの疲れに乗じて総理を自分の手にはめようと言う魂胆だった。

首相秘書官が、総理は徹夜で仕事をなさって、たった今お休みになったばかりですので、と答えると、江青は殊更真面目くさった様子を装いなが

ら、

「私から急用だと総理にお伝え願えませんかしら」

と頼み込んだ。これには秘書もどうしようもなく、総理を起こしに行くしかなかった。ここ数日来、外のスピーカーが騒ぎたてるため、総理は昼も夜も落ち着いてはいられなかった。秘書が呼びに来た時もまだ寝入ってはおらず、江青から急用と聞くと上着を羽織って寝室から出て来た。

江青は声をつくろいながら話し始めた。

「総理、あの学生さんたちの闘争ももう半月にもなりますのよ。やり方は確かによくありませんけどね、あの根性は見上げたものですわ。ここで学生の要求に応じないことには、せっかくのやる気を挫いてしまうんじゃないでしょうか」

「劉少奇は、何があろうと絶対に中南海から出すわけには行きませんな。あの子供たちにも事の次第をよく教えてやって、悪人のペテンにかからないようにしてやらなくてはいいかんでしょう」

この言葉を聞いた江青は、思わず顔を紅潮させた。

「でも総理、あの学生たちは最後まで頑張りぬくつもりですわよ」

「子供はまだ何と言っても幼稚ですから、よくものを教えてやりませんとね」

ここまで言っても江青が引きさがろうとしないを見ると、周恩来はさらに続けた。

「劉少奇の過誤の性質如何については、まだ決まっております。彼を公開査問に行かせるか否かについては、政治局で協議の上決定します」

江青は興奮しきってしまい、「ふん」と一言言って電話を切ると、秘書に命じて戚本禹を呼んで来させ、溜息まじりに言った。

「本禹、どうやら私たち自身でやるしかないようね。総理が劉少奇を中南海から出さないのなら、中南海の中で戦いましょう。蒯大富に人数を集めさせて、外部からも援護射撃をしてもらって、部

内外で歩調を揃えて大々的にやりますからね」

戚本禹は黙って頷いた。

1967年7月18日の朝、劉平平は弟、妹と一緒に、中南海内の職員食堂に朝食に出かけた。食堂に入ると、いつも座るテーブルのそばに壁新聞が出ているのが目に飛び込んで来た。江青、戚本禹の指示により、今晚、劉少奇の批判集会を開催するのだと言う。家に帰ると、子供たちは父、劉少奇にこのことを伝えた。

以下は、劉平平が語る当時の回想である。

「お昼ごろだったと思います。父は上衣のポケットから2枚の書類を取り出して、私たちに見せました。1枚は毛沢東主席が父の査問を認めたメモの全文で、もう1枚は母が河北省桃園で行った農村改革を賛え、これを推進しようと言う主席の指示を書いたものでした。この時が、父が私たちに中央の公文書を見せてくれた、最初で最後だったのです。それ以前には、父は私たちが書斎の机に近づくことも許してくれないほどでしたから。最後の正念場を迎えたその時、父は、私たちにはとても自分の憂いは伝えられないと思って……」

その夜、蒯大富と数名の学生指導者は数十万人を動員して、中南海を包囲した。天をも揺がすシュプレヒコールの中、中南海内部の造反派は劉少奇と王光美を別々に捕え、食堂に連れ込んで総括にかけたのである。こうして、劉少奇一家の監禁、流離、一家離散の苦難が始まったのであった。

江青が配下を指揮して、中南海で一暴れしているのと時を同じくして、林彪は別な戦場で指揮をとっていた。7月14日、林彪は江青とはかって、謝富治と王力を中央の代表として武漢に派遣し、対立する2派の争議の解決を図らせた。その実、この2人は江青、林彪のもくろみを心得ており、上手く人々をそそのかしてまわった。「三鋼」「三新」の大衆組織を支持し、一方の「百万雄師」を

保守反動として攻撃、両派の争いに油を注いだのだった。そして20日には、「百万雄師」と武漢軍区の兵士たちは王力との討論を行ったのだが、一部は興奮のあまり騒擾事件を引き起こしてしまった。これが正に、江青、林彪の思うツボと言うわけで、驚くなかれ、これが「7・20反革命クーデター」なるものにでっち上げられてしまったのである。憐れむべきは革命歴40年と言う武漢軍区司令官の陳再道で、このために彼は獄に下るはめとなった。

この「芝居」はいつから始まったのだろうか。この年の初め、中央文革小組から林彪にあてて「軍内部の一握りを捕えよ」と言う報告がなされ、林彪はこれに対して「全く同感なり」と指示した。また、身柄を拘束すべき人物のリストと、その根拠となる材料を検討した上で、呉法憲から北京で活動している士官学校の生徒にこれを渡し、ら致するよう示唆した。純粋な学生に、どうしてこの陰謀が見抜けようか。かくして、各大軍区司令官があいついで捕えられたのである。陳再道もこれが謀略であろうなどは露知らず、こうした手合とかかわりあってその先頭に立ってしまい、ついには林彪、江青の陥井にはまり込んでしまったのだった。

一方、謝富治と王力の化の皮は剥れることなく、刑場に赴くかの様子を装いながら、武漢から空路北京に帰り着いた。中央文革小組が総動員され、数千人が空港に出迎える中を、2人は外国元首の訪問時さながらの歓迎を受けて、北京入りをした。江青も役者の面目を示さんとばかり、王力の前に進み出ては、共に刑場の露と消えることも辞さんばかりの風情を見せるのだった。

7月25日には、天安門広場に軍民百万を集めて、中央代表帰還歓迎集会の大芝居が催された。この時、毛沢東主席は南方の視察旅行からまだ帰京していなかったため、林彪は天安門上で中央の位置を占め、実に威風堂々としていた。そしてこの件

では、学生たちの協力によるところが大きかったことを思い出し、傍の江青に、

「蒯大富は来てるかね」

と尋ねると、江青はにっこりと微笑み向き直って、石の欄杆の辺にたむろしている「井岡山」の腕章を着けた学生を手招きした。学生たちは喜々として駆け寄って来る。先頭に、青服青ズボン、面長でややのっぺりとした顔に黒縁眼鏡をかけたのがいた。

「彼がその有名な蒯大富です」

江青がこう告げるや、林彪も微笑みながら蒯大富を自分の傍に誘った。

全軍第2の統率者が、なぜかくも1人の学生を重んじたのだろうか。

林彪はこの年の初め、「軍内部の一握りを捕えよ」と題する中央文革小組による報告を公認した。この時あわせて呉法憲に、士官学校の生徒を各地に動員してら致、総括を行うよう指示し、さらに彼の虎の子、林立果に命じて同題の論文を書かせ、各地で騒ぎが大きくなるのを待って発行させようとした。しかし2ヶ月が過ぎ、「二月の逆流」も人々がうんざりするほど叩かれたと言うのに、軍内には何らの動きもなかった。

ある夜のこと、葉群は林彪がなかなか寝つけないでいるので、

「どうなさったんです。また眠れないんですか」と聞くと林彪は溜息をつき、手探りで枕元の明かりをつけた。

「軍はなぜ起たないのか、考えていたんだ」

「そのことなら、私、前から考えておりましたわ。あなたの選んだ中に、誰か有能な人なんていまして。それに士官学校にだって、影響力のある学生リーダーがいらないのに、一体どうして騒ぎを起こすことができるんです。江青をご覧なさいな。あんなにうまく学生の頭目を手玉にとっていないじゃありませんか」

「それならこっちも、影響力のある学生を探し

てくればいいんだな。君は誰がいいと思う」

「蒯大富。彼は相当、江青の力になっているわ」林彪はちょっと考えてから言った。

「そうだな、それじゃあ君、明日蒯大富に会って私の意志を伝えて来てくれ。捕まえる標的はだな、徐向前と葉剣英が統帥権を握っていながら、まだ何の手も及んでいないから、先ず連中をやってしまおうか」

葉群は微笑みながら頷いた。

「蒯大富にはやはり江青を通じてからの方がいいでしょうね。何と言っても、江青が育てた人材ですから」

林彪は笑いながら頷いた。

翌朝食事を済ませると、葉群は江青に電話をかけた。

「江青同志。実は林副主席から私に、造反派に色々と状況を説明するようにと言うことなんですけど、その連絡の相手を何人かご紹介願えませんか」

江青はすべてを見透すように言った。

「で、誰がお目当てかしら」

これにはさすがの葉群もちょっと驚いたが、すぐさま平静を装って言った。

「蒯大富が有力と聞いておりますけど」

「さすが、お目が高いわね。いいですわ。戚本禹から連絡させましょう」

江青はただ笑ってこう答えたのだった。

その日の夕方には、葉群は京西賓館で蒯大富と会うことができた。葉群は蒯大富をソファーに誘い、ぴったりと傍に寄り添ったが、蒯大富の方ではあまりの懇懇さに、背筋を筆のようにピンと伸ばしたまま、葉群をまっすぐに見ることができなかった。葉群の話を謹聴する。

「私は林副主席の代理人として、今あなたにお目にかかっていますのよ。早速ですが、あなたは軍内部での文化大革命をどう思われますか」

林彪が軍の内部で何人か捕えてしまおうと考え

ているらしいことは、蒯大富の方でも情報担当者を通じて察知していたので、さして考えることもなくすらすらと答えた。

「鉄砲を持った劉・鄧ラインと言うのは、この上なく危険な存在です。部隊内の走資派は徹底的に肅清すべきでしょう。さもないと文革は結局失敗に終わってしまいます」

心中ひそかに快哉を叫んだ葉群は、間髪を入れずに問いかけた。

「では、軍では誰が一番危険だとお考えかしら」

「賀竜はもう失脚しましたし、陳毅、聶榮臻はいくらも兵は動かさないでしょう。実権握っているのは徐向前、葉剣英の2人で、『二月の逆流』の時にも林副主席と対立しています。このまま2人を放置しておく、と、必ず災のもととなるでしょうね」

葉群は我が意を得たりとばかり、にこりと笑うと蒯大富の肩を叩いた。

「あなたの政治感覚はさすがね。林副主席も、早くからあなたの名前を耳にしてはほめちぎっていましたし、軍内部での文革遂行のため、力を尽くして下さることを強く望んでいるのですよ」

もう聞くまでもなく、蒯大富は葉群の意図をすべて察していた。全軍の副司令官殿のために働けるなどと言うことは、まさに無上の光栄である。帰って来ると早速専従要員を組織して、徐、葉2人の将官について情報を収集し、わずか1週間にして清華大学の『井岡山』紙上に、「徐向前を砲撃せよ。銃を手にした劉・鄧一味打倒！」と題する長文を発表した。徐向前はかつて陳再道に、彼は三反分子ではないとする御墨付を与えたことがあった。その陳再道が林彪と江青の陥井にはめられ、今、徐向前も叩かれようとしている。その功績は、蒯大富が筆頭と言わざるを得ない。蒯大富の方が林彪の片腕である呉法憲より、どれ程切れるか分からないぐらいである。この「文革のスター」を、どうして林彪が仲間に入れずにおこうか。

話を戻そう。蒯大富が林彪の傍に立ってみると、あの広々とした天安門広場が目の前に広がっており、あたかも中国のど真中に立った様な気がする。数十万もの人々が彼の足元でひしめき合い、叫び声を上げている。この広い世界で俺は既に世界的な偉人だ、と彼はこの時身にしみて感じていた。そしてポケットから「井岡山」の腕章を取り出すと、林彪にもこれを献じたのだった。この日、天安門の楼屋上は総て清華大学の関係者で埋められ、副司令官殿が自分たちの腕章をつけたのを見ると一斉に拍手した。

「林副司令官殿。井岡山の戦士たちは皆、あなたの周りにおります。我々は永遠にあなたの忠勇なる衛兵となりましょう」

台詞を覚えていたかのように蒯大富が口上を述べると、林彪の方でもこの恭順の意を表す言葉に悪い気のしようはすもなく、大いに喜んで堅く蒯大富の手を握って言った。

「私は諸君ら『井岡山』を頼もしく思っておりますよ。このたびの文化大革命は、実質的には内戦、それも全面的な内戦です。失敗するようなことがあれば、諸君と私とでまた井岡山に立てこもってゲリラ戦をやり、再度28年経てから新しい中国を築くのです」

この話を聞いた蒯大富は大いに緊張し、あわただしく林彪に問いかけた。

「林副主席。現在の情勢はそれほどまでに緊迫しているのですか」

林彪はにこりとして答えた。

「一番悪いところから考えるとね。今はブルジョア階級司令部から、統帥権を奪いさる最後の戦いの時なのです。君は学生の指導者だ、よく自分を鍛えておきなさい。これから君たちにやらせてもらわねばならん仕事は、山ほどあるのだから」

蒯大富は自分がかくまでも林彪に重んじられたかと思うと、もう日常の瑣事など超越した気分

なり、天安門下で熱狂する人々を見降ろしては、してやったりとばかり阿々大笑するのだった。

大会が終わると林彪は先に降りて行ったが、蒯大富はエレベーターホールで江青に呼び止められた。

「この大会は誰が開かせたのかご存知？ 主席ですよ。主席は上海で、この大会の開催と、軍からも何人かを捕えることに、それぞれ同意なさったのです。2日前の私の講話は見ましたか」

蒯大富は頷いた。江青は続ける。

「林副主席は“全面内戦”を提起しましたが、私は“文攻武衛”を提唱します。帰ったら集会を開き、この精神を伝えなさい」

蒯大富は頷いて、「はい」と答えた。江青はその神妙な様を見て笑った。

「蒯司令ともあろう人が何をそんなに緊張しているんです。副主席のお話に驚いたのかしら。心配はいりません。私の言った“文攻武衛”にさえ従っていれば、井岡山に立てこもるようなことはありません。天安門は我々のものですよ」
言い終えると江青は蒯大富の肩をポンと叩き、エレベーターの中に消えていった。

清華園に帰ると蒯大富は直ちに数名の秘書を呼び、あたかも四方に名を轟かす山大王が、各地の寨主にお触を發するように、連夜各省の造反派の指導者たちに電話をかけさせた。林彪、江青からの指示を伝えるので、北京まで聴きに來るようにと伝えるのだ。天安門の頂に立ち、全国造反派領袖の証しすら胸にかかげた蒯大富の命である。地方造反派の幹部ごとき、どうして背くことなどできよう。

7月13日、全国百有余人の造反派指導者たちが清華園工字庁に会合した。ホール前には「形勢分析会」の横断幕が掲げられ、両側には「文攻武衛」と言う江青の指示と、「軍内走資派を打倒せよ」と言う標語が貼られていた。蒯大富は武者ぶるいしながら盟主の席に着き、白晳の面はさらに血の

気を失っていた。

会場の厳肅な雰囲気は、世界大戦中の最高参謀本部作戦室もかくやと思われるほどの緊張であった。

これ正に、

平歩天ニ登リテ施主ヲ思ヒ、

死心地ヲ踏ミテ恩人ニ報ユ

と言うべきであろうか。

第8回 長城毀タリテ主席怒リヲ動力シ、車馬ヲ舍ツルニ奸賊無情ナリ。

さてもここに、全国各省の造反派の頭目を清華大学に集め、形勢分析会は開かれたのである。先ず、蒯大富が林立果の書いた「紅尖兵」と題する文章を読み上げ、続いてこのテーマについて発言した。

「軍内部において一握りの者を捕えることは、文化大革命における第3の戦役であり、2つの司令部による最後の決戦であると林副主席も我々に指示している。『7・20』事件によって決戦の火蓋は切られた。この戦いに勝利することは決して容易ではないが、最後の決戦において不覚を取るとは絶対に許されない。『文攻武衛』と江青同志は言ったが、我々も武装しなければならない。銃を持った劉・鄧と渡り合うのには、銃がなければだめだ。鉄砲から政權が生まれるというではないか」

この発言が終わるや、満場の拍手が沸き起こったのだった。

会議がまさに盛り上がっている時、江青の使いが、閔鋒が『紅旗』11号に書いた軍内部の一握りを捕える件に関する社説のゲラを届けて來た。幹部連は内容をほめちぎっては狂わんばかりに歓喜し、口々に「われらが江青同志！」の名を叫び続けた。

会議に参加した百有余名の代表たちは、北京に一泊しただけですぐに各地方へ散って行き、そこでも同様の「省形勢報告会」を主催した。そして戦闘部隊を組織するや軍区司令部に押し寄せ、武装部を襲い、軍の弾薬庫を打ち壊した。軍内部の敵を捕えろと言う怒号が渦巻く中、国中に銃声が起こり、大規模な内戦が間近に迫りつつあった。

蒯大富自身もどうして泰然と構えていられよう。石家荘、鄭州、濟南、……、形勢の逼迫が伝えられる所、どこへでも飛んで行った。もう厳然たる欽差大臣である。後にうわさされたところによると、戚本禹は首相就任をもくろんでいたが、彼の組閣名簿によれば、蒯大富は国防部長に予定されていたと言う。無論、これは伝聞にすぎないが、当時の蒯大富の東奔西走の苦心の程が窺えよう。

風雲急を告げていたまさにこの頃、8月中旬に毛河東主席が上海から北京に戻った。そして先ず『紅旗』11号の社説を「毒草」とであると批判し、次に、林彪、江青一味による「軍内部の一握りを捕えよ」と言う動きは、軍紀を乱し、実権を奪おうとするものであるとしてけん責した。そして自ら筆を執って、「還我長城」の4文字を書きつけたのであった。

毛主席が帰京したその夜のこと、林彪は寝室で特配の健身茶をすすっていた。葉群が彼の傍に座り、黙って毛沢東から差し戻されて来た書類に目を通していった。林彪が毛主席の裁可を得た後発表しようとしていた、「軍内部の一握りを捕えよ」と題するこの報告書は、毛主席の閲覧を経た後、「軍内の一握り」という語句はすべて抹消されてしまい、「却下」の附籤と共に差し戻されてきたのだった。この件に関して主席が次にどんな手をうってくるかということは、林彪夫婦を実際のところ悩ませていた。この原稿は発表されさえしなければ余人に知られることもないが、林立果の書いたものは、白地に字黒々と世人の目の前に晒されている。もし主席が問い詰めてきたなら、一体

どうすればよいのだろうか。

「私たちはまだいいわ。立果はどうするのよ」葉群は気を鎮められず、林彪の体を揺すりながら言うと、林彪はこう答えた。

「夫人外交をやるんだね。江青に会って方法を相談するんだ。あの『軍内部の一握り』については彼女だって一枚噛んでいるんだし、責任を問われるんなら彼女だって同罪なんだから」

ちょうどその時、「江青同志が副主席とお話しになりたいそうです」と、当番が電話をしてきた。これを聞いた葉群は嬉色を浮かべ、すぐ電話を継ぐよう命じたのであった。

この時、江青は緊張した雰囲気の中、釣魚台で康生、陳伯達と共に対応策を協議していた。この康生こそが、軍内部の一握りを捕えることに最も積極的であった。謝富治と王力が武漢から帰還した際には、毛主席が両名の歓迎会を開くこと、さらには「軍内部の一握りを捕えるべし」という方法にも同意しておられるなどと王力に言ったため、関鋒なども『紅旗』11号の社説を書いたのである。そして今、毛主席がこうした事実をすべて洗い出そうとしているわけであるから、彼らとしてもあせらぬわけにはいかない。こうして夜半まで話し合ってみたものの、何ら結論を見るに至らず、仕方なくもう一度林彪の意見を聞いてみることになったのである。

江青は電話を通じてこうやってきた。

「葉群同志、ちょっとよろしいですか。主席は『軍内部の一握りを捕えよ』というやり方に批判的なのですけど、林副主席からはこの件について何か指示がありましたこと？」

葉群の心構えの程は江青に遠く及ばず、あわててこう答えた。

「副主席は、一貫してこのやり方には反対です」江青はこれを聞くと思わず苦笑してしまい、さらに問いかけた。

「『紅尖兵』っていう文章、林立果が書いたん

ですってね」

これには葉群も驚きの余り冷汗が流れ、アッと
言っただけでしばらく立ちつくしていたが、やっとの
ことでこう答えた。

「林立果がああ原稿を書いた時には、この種の
言い方はまだありませんでした。人民日報に送付
する時になって書き加えたんです」

林彪は傍で聞いていたが、煩しさに耐えかねて
口をはさんだ。

「江青に言ってくれ。『人民日報』と『紅旗』
の編集部に悪玉がいないか、ちょっと洗ってみる
ようにとな」

葉群はすぐさま意図を悟ると、江青に伝えた。

「江青同志、副主席からの指示です。『紅旗』
と『人民日報』の両社に問題がないか調べていた
だきたいとのことです」

これを聞いた江青は、他人に罪をなすりつけよ
うという林彪の意図を察した。それにしても罪を
全部、『紅旗』と『人民日報』にかぶせてしま
おうというのもうまい手で、車を捨てて将を保つ
こともやむを得なかった。

陳伯達が横から尋ねた。

「副主席は、何とっておられる」

江青は、暗い表情で、にやりと笑って答えた。

「副主席は車の方を捨てるようね。ついては、
あなたにその任に当たっていただきたいようよ」

陳伯達は飛び上がらんばかりに驚いた。

「そ、そりゃ一体、どういうわけだ」

「この反軍文件は皆、あなたが署名したもの
じゃありませんこと」

江青がこう言うと、陳伯達はさらにあわてた。

「それでどうして私がやらなきゃならんのだ。
ありゃ、康生同志が主席の了承済みだと言った
から、私は……」

「私がいつ、主席の了承を得たなどと言った」

康生が冷笑を込めて言うと、陳伯達は康生を見
つめたまま沈黙してしまった。

江青は陳伯達が困り切っているのを見て、助け
舟を出してやった。

「よく考えてご覧なさいな。誰がそう言ったの
を聞いたんです」

陳伯達は江青の言葉を反芻しているうちに、こ
れは誰かを身代わりにして、自分を逃れさせてく
れる気だなと気がついた。

「天安門で、王力が私に言ったんだ」

彼が目を白黒させながら言うと、江青もやっ
と口元を緩めた。

「人にはそれぞれ分があることを、忘れてはい
けませんわね。それじゃあ、王力、閔鋒、戚本禹
の3人に、始末をつけさせましょう」

陳伯達が、

「でも、どうやって連中をおとなしく納得させ
るんだね」

と尋ねると、康生がこれを受けた。

「近頃、北京に『五・一六』とか言うグループ
があって、全国に活動を拡げておるんだが、これ
が人数は少ないがなかなかやりおる。連中の矛先
は周恩来首相の方に向いておってな、戚本禹はこ
の連中と連絡があるらしいんだ。そこでだ、事が
こうなってしまった以上、この手合はまとめてつ
まみ出すしかないんじゃないだろうか。反軍乱
軍、その上、中央の分裂を謀ったとなれば、罪名
には事欠かんだろう」

陳伯達は、そうした人たちを見殺しにするのは
忍びがたかったが、この時ばかりは自分の足元さ
え危い状態であったので、同意せざるをえなかつ
た。

「これで、軍内の走資派どもはまたのさばれる
ってわけかね」

陳伯達が溜息まじりにこう呟くと、江青が言っ
た。

「そうはいくもんですか。私たちも『一握り』
とは呼びませんけど、捕えるべきは捕えるので
す。刺大富にも注意しておきましょう。『軍内』

の2字はまずいでしょうけど、倒すべきは倒さねばなりません、とね」

さて件の戚本禹はといえば、周恩来首相の罪状集めに狂奔していた。何とかして、周総理を17年に及ぶ『旧政府』の頭目、最大の保皇派に仕立てようと言うわけで、ここらが、彼が首相になりたがっていたと伝えられる由来であるらしい。しかし、康生、陳伯達、それに江青の支持なくして、一体戚本禹ごときに如何程の胆力があったろうか。

この日、戚本禹は中南海内の執務室のドアに鍵をかけて、首相の「罪状」に関する材料を整理していた。突然、江青差し廻しの車が彼を迎えに来て、釣魚台で会議を開くのだと言う。彼は、資料を金庫に収めると車に乗り込んで、釣魚台に到着した。

会議室には中央文革小組のメンバーが勢揃いしており、謝富治も参加して、室内の空気は異様に緊張していた。江青は戚本禹が入って来たのを認めたが、目を閉じたまま見やろうともしない。暫らくすると、1人の軍人が檔案袋をかかえて入って来て、それを江青の目の前に置いた。江青は中の資料を取り出して、読み終わると康生に渡した。康生は顔色一つ変えないでざっと目を通すと、戚本禹に両眼を目据えて言った。

「先頃、中央文革内部に問題が生じた。一つは反軍乱軍。そしてもう一つは、『五・一六』兵団を組織し、中央の分裂を謀議したことである。これは重大なる反党事件であり、政治局は本件処理のため、王力、閔鋒、戚本禹の3人を職務停止の上、査問にかけることと決定した」

王力ら3人は、突然の出来事に立ちすくんでしまった。そして間髪を入れず、謝富治の合図で、駆け込んで来た武装警察隊員が、彼らの腕を押えたのだった。戚本禹は気を取り直すと、江青に向かって絶叫した。

「江青同志、わけを話して下さい！」

江青は、檔案資料を前に推しやりながら言った。

「わけなら、お前が整理していたこの資料が説明しているじゃないの。持ってお行き」

戚本禹は江青の陰険そうな目つきを見た時、自分がスケープゴートに仕立てられたことを悟った。こうなっては、逆らってみても無駄なこと。王力、閔鋒の2人と、大人しく警官に引かれて会議室を出て行くより他なかった。

陳伯達は肥満した顔に汗を浮かべながら、王力一味が引き立てられて行くのを見ていたが、額の汗をねぐうと謝富治に言った。

「連中をちゃんと閉じ込めておけ。間違っても、外と連絡をとらせるんじゃないぞ」

謝富治の方でもこの言葉の真意は承知しており、陳伯達を慰めるように答えた。

「ご安心なさい。この手合についちゃあ、扱い慣れてますから」

江青の方はこの場の煩しさに耐えかねて、康生らに挨拶を済ませると、そそくさと会議室を離れ、私邸に帰ってしまった。そちらでは董申が先刻来待ちかねていたのである。

江青は董申を傍に呼び寄せた。

「蒯大富や韓愛晶は、どうしてる？」

「今、地方で活動中ですが」

「なら、何とかしてできるだけ早く連絡をとって頂戴な。『軍内』の2字はもう使わないけど、捕えるべきは引き続いて捕えますからね。内戦は避けたくてももう避けようがないんだから、やはり銃をとらなきゃね。毛遠新は東北で上手くやって、もう武装したって言うじゃない」

「蒯大富がもし王力たちのことを聞いたら、何か思うところがあるんじゃないですかね」

江青はかぶりを振った。

「蒯大富はもう赤い戦車の上に立っているのよ。飛び降りてやめてしまうなんて、あり得ないわね」

話の最中に張春橋が入って来て、康生が、江青と一緒に安徽省から上京した代表を接見するため待っていると告げた。江青は席を立ちながら董申

に指示した。

「あなたはすぐ発って、王，関，戚事件について、造反派によく説明しなさい。これは文革小組が自ら摘発したもので、文革小組のプロレタリア階級の気魄を示すものだと言っておくこと。それから蒯大富を探して、私からよろしくと伝えておいて頂戴」

30分後、江青は安徽代表を接見していた。そこで熱演一番、王，関，戚との闘争の顛末を語り、感動した台下の聴衆は声高々と「江青同志に学ぼう！」と叫んだ。

そしてその頃、董申は煽動活動のため西へ向かう列車に乗り込んでいた。

蒯大富は江青から指示を受けると、果せる哉、勇氣百倍した。毛主席の言葉は戦闘を止められなかったばかりか、激烈の度を加える結果となってしまった。長城の内外、長江の南北で、幾千万もの人々が、林彪、江青一味の手によって血の海に投げ込まれて行ったのであった。

これ正に、

精生白骨多ク策ヲ謀リ、

応変画皮更ニ人ヲ害ス

の言葉通りであろう。

第9回 主席、蒯大富ヲ喻シ、 工人ノ血、清華園ヲ濺グ。

蒯大富は内戦の中で「功績」を重ね、名実共に清華園の太上皇となった。どこに行くにも、秘書、ボディガードを前後に従え、国宴への参加、専用車の送迎など、そこらの中央委員よりも鼻息は荒かった。

時は移り、1967年になると、名目上は全国の大半の省に革命委員会が成立していたが、その実、内乱状態は続いていた。清華園でも蒯大富が鎮座していても平静ではなく、4月14日になると、ついに内部分裂にまで到った。

この日開かれた井岡山幹部会議の席上、蒯大富は学内革命委員会の設立を提起したのだが、一部幹部は、革命幹部が1人も解放されていない現状では、三結合による権力機構の設立など望むべくもないとして、これに同意しなかった。ところが蒯大富は全国の大学の先頭を切るため、こうした意見には全く耳を貸さず、設立を強行してしまったのである。そこで、反対派は「四・一四」派、別名「山下派」と称する一派を起し、蒯大富に叛旗を掲げた。対する蒯大富のシンパは、自らを正統派として、山上派と呼んだ。かくして山下・山上の両派は、清華園内で抗争を演ずることとなったのである。

堂々たる蒯司令の膝元に忽然と現れた彼と対立する一派は、ずい分と彼を悩ませた。劉・鄧・陶のことなどは忘れてしまい、山下派との抗争に力を注ぎ、彼らを一撃のもとに粉碎できないのに腹を立てた。抗争は次第に激しさの度を深め、6月には武闘を演ずるまでにエスカレートしていった。

清華園は元来一枚岩であったので、戦闘力はこれといってなかった。しかし、蒯大富は異分子を消し去るため、科学館を中心として文攻武衛指揮部を設けて戦闘部隊を組織した。一方の山下派も蒯大富が武装したのを見て、教室棟を一棟占拠して武闘の拠点とし、校庭の鉄柵を抜き取っては集め始めた。鉄柵には尖頭が付いており、即成の武器と言うわけである。

蒯大富は山下派がかくも原始的な武器を探して来たのを見て、笑いを禁じ得なかった。内戦は全国各地で発生しており、いずれの省にも蒯大富の友人がいる。北京市は民間組織の銃砲所持を禁止してはいたが、ひそかに彼のもとに運び込まれる銃器は少数に留まらず、また各省における抗争で、反対派に破れた戦闘隊員が北京に逃げ込んで彼の一派に投じたため、さらに蒯大富側の戦闘力を増強させることとなった。

この日、夜が明けたばかりの清華園内にラウド

スピーカーから流される「山下派に対する投降勧告」が、1回、また1回と響き渡った。山下派拠点内の者が飛び起きて窓を開けてみると、建物全体が山上派によって完全に包囲されているではないか。山下派の方では泡を喰ってしまい、あわてて武器をとっては要所の守備に就いた。

蒯大富の武闘戦術についての研究は頗る高度なもので、決して攻撃をあせるようなことはしなかった。彼の側では、敵の拠点内に備蓄されている食糧が比較的豊富であるという情報を入手しており、口々に山上派との決戦を叫んでいる連中を、何とか戦わずして投降させる手はないものかと思案した。そこで彼は先ず山下派拠点内の水道、電気を止めるよう命令し、次いで拠点周辺の路上に土塁を構築して、山下派に対し水も漏らさぬ包囲陣をしいたのであった。

一方の山下派でも、決死の心構えで臨んでおり、スピーカーは「覚悟は決った、死も怖れぬぞ」のスローガンを怒号し、「インターナショナル」を流すなどもう撃ちてし止まんの気概十分であった。戦闘員が1人、頭をひょいとものぞかせて一言叫ぼうとしたその時、頭を撃ち抜かれ、声を出す間もなくその男は絶命してしまった。

ここでついに、スピーカーのスローガンは「血には血を以て報いよ」に変わったのだった。

清華園の硝煙の臭いは市内にも伝わり、各地の造反派で戦局の推移に関心を寄せぬ者はなかった。四川、陝西、湖南、湖北、それに広東、広西の武闘では近代兵器が持ち出されたとは言え、実際に銃撃戦となったのは今回の北京が初めてだったからである。もし、さらに武闘がエスカレートする様ならば、造反派がそれぞれ武装することは必至であった。

この時になって「内部参考」で清華の動静を知った毛沢東主席は、武闘問題は全国的に解決されなければならない段階にきていると感じ、すぐにも学生指導者たちと会いたい旨、江青に知らせた。

毛主席に会えるなどということは、造反派にしてみれば生涯の一大幸福事である。しかし、蒯大富はすでに2年前に葉林とハンスト戦術で戦った時の彼ではなかった。天安門上に林彪と肩を並べたその日から、彼はこの世で自分にままならぬことなどない、と考えるようになっていた。一度、彼が女性秘書と世間話をしていたこんな駄法螺を吹いたことがある。

「今、誰が俺を接見するって、行きたかないね。主席の接見だって、どうってことないやね」

蒯大富が油断なく山下派壊滅戦を進めているちょうどその時、張春橋が電話をよこし、毛主席の接見があるから今晚7時に京西賓館に来るように、と伝えてきた。時計を見るとすでに6時ではあったが、今は山下派が包囲網を突いて血路をひらくとしている時である。彼はフンと鼻を鳴らすと、顔色一つ動かすことなく各棟の立哨地点に督戦に行った。

この頃、京西賓館の内外には嚴重な警備が敷かれ、程なくして毛沢東主席が到着した。

主席が会見場に入る時には聶元梓、韓愛晶、それに譚厚蘭らは、ドアの前に立って主席を出迎えていた。「五大指導者」の中で蒯大富だけが姿を見せていないことに、張春橋は非常にあせり、再び清華大に電話をかけた。

電話に出た秘書が、

「今、拠点の状況を視察中です」

と答えるのを聞いて、張春橋は余程この秘書を怒鳴りたかったのだが、悪態をつくのもと思い直し、ぐっところえるしかなかった。

「早く彼に伝えてくれ給え。この会見は重要なものなんだ」

秘書は蒯大富を探して張春橋の伝言を伝えた。蒯大富は口元に微かに笑みを浮かべると、秘書に先ず何か食べる物をと命じ、それから車を呼んだ。時、すでに7時であった。

蒯大富が会見場に到着した時には、毛主席は話

しを始めており、彼が入って来ると主席は暫し話を止め、冷たく彼を見やった。一瞬、会見場のすべての人の目が蒯大富の方に向けられ、彼の傲慢な気持ちも主席の威厳ある眼光に刺されては、たちまち萎えてしまった。天安門上でのあの歪んだ自尊心は、影も形も失せてしまっていた。この時になって、主席と向かい合っている自分が如何に卑少な存在であるかと思い知らされ、膝が震えるのを止められなかった。

毛沢東主席は暫くの間彼を見つめたままであったが、ようやく口を開いた。

「君が、蒯大富司令かね」

蒯大富はおずおずと答えた。

「蒯大富です」

突然主席が声を荒げた。

「全く、君はお忙しいようだな。私が招いた客で、君ほど遅れて来たものはおらんぞ」

「緊急の案件にかかりきっておりましたので」

「何のことだ。山下派攻撃の件だろう」

主席にこう問い詰められて、蒯大富は額に汗を浮かべた。さらに主席は続ける。

「私は1年前、大連合を説いた。なぜ君たち子供はまだけんかをするのかね」

ここで蒯大富の余りの狼狽ぶりを見かねた江青が、口を挟んだ。

「大富、主席があなたを批判なさるのは、あなたを思っていることなのです。帰ったら山下派とも和解しなさいな」

蒯大富は、はい、はい、と続けるばかりである。主席が言った。

「今日来てもらったのは、諸君に一言呼びかけたいと思ったからなんだ。武闘は直ちに停止すること。銃器は没収、納められない土壘などは、部隊に命じて持って行かせる。武闘をやめなければ人民はついては来ないよ」

毛主席のこの言葉は、人々の希望と一致したもので大いに支持を得た。当時、全国の国民は皆武

闘に倦んでおり、内戦の停止と生活の安定を心から望んでいた。

話を聞き終えた蒯大富は、寒心に耐えなかった。主席の話は、文化大革命の中での蒯大富の役割は既に終わったことを示しており、彼はこの時、自らの末路をふと予感したのだった。

が、男たるものどうしてやすやすと負けを認められようか。清華大に帰ると彼は直ちに幹部会議を召集し、山下派拠点に対する2回目の攻撃を命令したのだった。

翌日の午前9時頃、山上派のスピーカーが「義正詞嚴」とばかり鳴り響いた。

「偉大な指導者、毛主席は、昨夜我が井岡山の指導者、蒯大富同志と接見した。主席の指示は次の通りである。一切の武闘拠点を捨て、バリケードを撤去すること。この偉大な指導者の指示により、我が井岡山司令部は『四・一四』武闘隊に対し、1時間以内に武器を捨てて投降するよう命ずる。さもなくば1時間後、我が井岡山の戦闘員が諸君に対して攻撃を開始する」

最後通牒を流し終えたその時、西門の外から忽然とシュプレヒコールのざわめきが聞こえてきた。蒯大富も、はて？と感じ、人を遣って見てこさせようかと思っているところへ、董申があわてて駆け込んできた。

「大富、労働者組織が立ち上がったんだ。連中め、しゃれた名前をつけてやがる。『毛沢東思想宣伝隊』と言うんだ。先ずお前の司令部から手をつけるらしいぞ。この話は俺も今朝になってやっと知ったんだが、お前、慎重に対処せにゃならんぞ」

これを聞いた蒯大富は司令の尊厳などどこへやら、狂ったようにわめきたてた。

「清華は、決して部外者の介入は許さないんだ。お、俺が行って叩き出してやる」

そうこう言ううちにも、工宣隊の隊列は井岡山総部の建物にまで押し寄せて来た。「文闘をやれ、

武闘はやめろ！」のシュプレヒコールは耳を聳せんばかりである。荊大富はパーンと窓を閉めると、秘書を呼んで幹部会議の召集を伝えた。

工宣隊は山下派の拠点にも向かい、途中路上のバリケードは労働者たちの手によってきれいに片付けられてしまった。山下派の拠点は封鎖されてから既に1月以上も経っており、貯えられていた食糧は全く底をついていた。水もなく、床のコンクリートに穴をあけ、井戸を掘って泥水をすすって渴きをいやす有様。山上派によって殺された者の死体は安置すべき場所もないため地下に投げ出され、腐乱が始まっていた。電気を断たれ、夜になれば全てが手探りである。渴きと餓え、陽の光を見ることもない。どの顔も青白く、ざんばら髪でまるで地獄の亡者のようである。彼らは工宣隊がバリケードを払いのけ、シュプレヒコールを繰り返しながらやって来るのを見た時、救いの主が現われたかのようにふらつきながら建物から出た。何人かの者は階段を降りて来た所で倒れたが、労働者が駆け寄って次々と病院へ搬び込んだ。

工宣隊は宣伝カーのスピーカーを通じて、山上派に武器を放棄するよう命じたが、まばらな銃声が返ってただけであった。

夜半になって小雨が降り始めた。工宣隊は協議の結果、山上派の拠点に「平和進攻」し、彼らに武器の提出を求め、武闘を停止させることに決めた。指揮班の号令の下、万余の労働者たちが、科学館を中心とする各拠点に四方八方から押し寄せて行った。

荊大富は自分の方が包囲の目標となろうなどとは思ってもみなかったのが、腹の底から怒りがこみ上げ、自らマイクを取ってこう叫んだ。

「労働者同志諸君。清華のことは、我々自身の手で解決する。工場の問題解決が諸君の手に委ねられているのと同じことだ。諸君は、直ちに清華から立ちのきたまえ」

が、工宣隊がどうして彼の叫び声などに耳を貸

そう。間もなく、彼らはそれぞれ拠点に肉迫した。荊大富の方でも、早々と準備は出来ており、各階の窓を閉め切って、労働者の一群が窓の下に達するやレンガ、瓦片、インク瓶、それに壊れた椅子などを投げつけた。これには労働者の側でも、100人近い負傷者が出たため、いったん退くしかなかった。

暫らく休むと工宣隊は宣伝カーを先頭に立てて、第2次攻撃を開始した。荊大富は、大急ぎでマイクをとって命令を下した。

「井岡山の戦闘員諸君、銃を構えたまま命令を聞いてくれ。断固、敵の進攻を撃退せよ！」

労働者の群はまだゆっくりと前進して来る。荊大富の目は、まっ赤だった。この2年来、彼は今までこのような目にあったことがない。声をふり絞って威嚇した。

「これ以上近寄ると、発砲するぞ」

しかし、労働者の隊列は尚も拠点に迫りつつある。荊大富はついに凶悪な叫びをあげた。

「サーチライト点灯、投弾始め！」

幾つかの建物の屋上から、数十機のサーチライトが同時に照射を始めると、清華園は昼間の様に照らし出され、続いて雷に似た爆発音が起こった。労働者たちは、声が地面を這うのを聞き、後の方の何人かは逃げだした。

死の様な沈黙が数分続き、労働者たちが起き上がってみると、沢山の人が血の中に倒れている。彼らは激怒し、手を取り合って、また前に突き進んで行った。荊大富の精神の緊張も極限にまで達し、歯咬みしながらまさに階下に迫ろうとする労働者の隊列を見て、突然大声をはり上げた。

「撃て！ 僕のために撃ってくれ！」

その刹那、爆竹のような銃声が沸き起こり、前面にいた労働者たちは倒れ伏した。隊列は乱れ、ばらばらと退却を始めた。そして各棟間の空地には、死体と傷ついて動けなくなった労働者が横たわるばかりとなった。

この血塗られた惨状を見た蒯大富は、狂ったかのように笑い声を響かせるのであった。

が、その翌日の午後、数十万もの労働者が清華に詰めかけ、水も漏らさぬように清華園を完全包囲しようなどとは、蒯大富も思いもよらなかった。水道、電気、交通までもすべてが遮断され、いくつかの武装拠点も衆矢の的にすぎぬ孤島となりはてた。この時になって蒯大富もやっきになり始め、董申を探して相談しようと思いきや、その董申の方では死人を見てさっさと行方をくらましていた。江青に電話しようにも電話線は切断されている。一日中飲まず食わずで、人心も自然動揺し始めていた。

蒯大富はすでに大勢決したと見、自分自身も労働者たちに捕われることを察知した。夜半、彼は手探りで服装を改めるとひそかに2階の窓から飛び降りた。眼鏡ははずし、知った道なのを幸い、清華園をすり抜け脱出した。

1968年2月27日のことである。

これ正に、

乱世雄ト称スルハ狂覇ヲ為シ、

南柯ノ一夢、土崩ト成ル

であろうか。

第10回 醜類汚行、墳墓ニ送ラレ 忠魂偉業、豊碑ヲ樹ツ。

さても蒯大富は清華園より逃げ出して後、全市の壁面に「蒯大富に血の報いを！」というビラが貼られているのを見るにつけ、鳥肌立つのを禁じ得ず、家を失った犬の様に韓愛晶を頼って航空学院にころがり込んだのだった。

韓愛晶と蒯大富は、知り合って2年この方、政見は必ずしも一致しないものの、個人的には情に通じ合うものがあった。この度の蒯大富の凋落ぶりにもいたく同情を寄せており、すべての大学を糾合し、翌日デモをかけて清華井岡山を支援する

ことにしていた。

一方、江青の情報網にぬかりのあろうはずもなく、航空学院の動静はただちに彼女の知るところとなっていた。そして夜の明けぬうちから韓愛晶に電話をよこし、蒯大富を呼び出した。

蒯大富が電話に出るなり、聞こえてきたのは江青の罵り声であった。

「蒯大富、あなたいい度胸してるわね。とうとう鉄砲持ち出して、工宣隊員を殺したかと思えば、今度は韓愛晶を引っ張り出して、工宣隊とぶつかる気だってね。私ゃ心配で夜も眠れないよ。あなたのようなまねをしでかしてくれたんじゃ、もう救いようがないからね」

蒯大富は憐れっぽく哀訴した。

「江青同志、まさか僕には、もう何も助かる道がないって言うんじゃあ……」

「一つだけあるわ。大学へ帰って、労働者の話をよくお聞き。決して蒯司令だなんて気どらないこと。あなたの情状について話してもらえるように、謝富治同志に、私から話しはしておきましたからね」

蒯大富こそは、江青の手によって作られた文革の怪童であるのに、なぜ江青は彼を見捨てようとするのだろうか。これこそ、江青一流の権謀術数なのである。蒯大富は労働者を殺しており、労働者の方でもけりをつけさせようと、彼を探し廻っている。もし蒯大富を彼らに引き渡さず、彼らの機嫌を損ねれば、必ず江青の地位を危なくするに違いない。況んや、毛沢東主席の激怒を招くことは必至である。実際のところ、蒯大富はすでに用済みであり、彼を引き渡して百利こそあれ困るような事は何もないのであった。

午前9時、謝富治が江青の意を受けて、航空学院に蒯大富、韓愛晶を訪ねた。

「昨日の夜、毛主席はずっと清華の動静に注意しておられたんだがね、君、蒯大富のことは『頭脳肥大』だと批判しておられたよ。君はすぐ清華

に戻って、労働者の監督に服するようにとのことだ」

謝富治にこう言われては、蒯大富も彼に伴われて清華園に帰るしかなかった。この時、清華園内では、数十万もの労働者たちが勝利を祝っていたのである。

しかし結局のところ、江青も別に旧情を忘れたわけではなかったようである。蒯大富は大学に帰った後、学習班で学習をすることになり、年末には青銅峡での仕事に配置された。これが蒯大富が2年間にわたって江青のために旗を振り、叫び続けたことに対する彼女からの報酬であったと言えるようか。

とは言え、人々は江青の罪業を忘れ得ないのと同様、蒯大富の罪業も決して忘れはしなかった。

「四人組」が粉砕された後、蒯大富も聶元梓、王大賓、韓愛晶、譚厚蘭など、これら数名の「学生指導者」たちと共に、人民の法廷に送られて行った。

ちょうど蒯大富が判決を受けるのと時を同じくして、1人の人物が監獄から出て来た。王光美同志がその人である。この一進一退の劇的な変化の中から、中国の歴史が如何に巨大な変化を遂げてきたかを見ることができよう。ただ、惜しむらくは、彼女のあの尊敬すべき夫、劉少奇同志に再び会うことはできない。この、中国人民が公式に選出した法治国家の主席が、1969年10月12日、開封で世を去った時には、見守る家族、友人は居らず、花輪も黒絹もなく、霊柩車は六九式ジープで、遺体の足は車外にはみ出していた。

No. 123

姓名 劉衛黄

これが彼の遺骨の保存証である。一代の開国の元勳は、このようにして世を去ったのであるが、彼の偉業は決して炉の炎と化して消え去ることなく、人々の心の中に大きな碑を築いたのである。

これこそ正に、

乱世流年、鬼蜮多ク

民ヲ屠リ血ヲ飲ミテ、竟ニ仏ト称ス

愚公億万、終ニ^{たか}崛ク起チ

群魔凱歌ヲ奏デルヲ、尽ク斬ル

のままであろう。

〈解題〉

“講談”になった蒯大富と文革

(毎日新聞外信部) 上村 幸治

「蒯大富演義」は、農村読物出版社（北京）発行の『中外通俗文選』1985年第1輯に掲載された、庶民向けの小説である。文化大革命というまだ生々しい史実をわかりやすく、おもしろく書いている。もちろん、文革全面否定を打ち出した現政権下で出されたものだから、紅衛兵リーダーの蒯大富や江青、林彪は“敵役”だし、故毛沢東主席、周恩来首相は、彼らの暴挙に一貫して反対していたことになっている。毛沢東と江青のつながりは断ち切れ、江青と林彪がこの巨大な運動のシナリオを書いたことにしてある。当時、中国から伝えられた話とはかなり食い違い、「林彪・江青反革命集団」を裁いた特別法廷の判決に沿って忠実に書かれている。中国の人達は、政治的事実と真実の間にあるあやを知り尽くした上でこの「演義」を楽しむのだろう。私達は、この「演義」によって、文革が、そして毛沢東がいまなお巨大な事実と存在であることを知り、そして文革終結、毛沢東死去から十年の今日の中国人の思いを感じとることができる。

しかし、この作品から感じとられる本当の面白さは、わずか20年（文革発動から）にして、蒯大富という人物が「演義」という講談風読みものの形で紹介されたことかもしれない。蒯大富は、もはや単なる反革命という政治的存在として批判するだけの対象ではなくなったのである。作者のど